

代匠記

十一上

彗

共廿九

庫文閣内			
二〇	二	三	和書類
函	五	四	
一	二	五	
五	九	〇	
架	冊	號	

内閣文庫	
番號	和 32450
冊數	29 (19)
函號	200 132



玉板 六ノ右一
 大工採巻 八左
 和石 十ノ右
 黄揚枕 十ヲ右
 侍従 十ヲ左
 義テ 十ヲ左
 ソメニヲ 十ヲ左
 冷風 世五

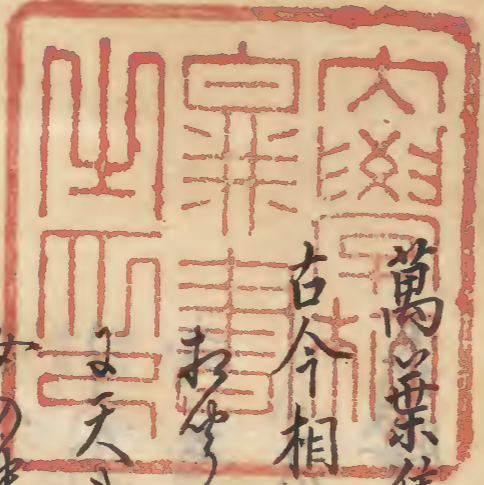
萬葉集卷第十一抄上
 古今相聞往來歌類之上

御本

旋頭歌

旋ハ回旋頭ハ頭首也。平六人の集れ申すかるに

てかろよめつとそ新もかろり常乃まに大守も
 七字にも下下下の句にらまてと下下ゆのくく
 あれとふれ乃乃新とれ乃よかろる也おろ頭
 尾とよまよらるれやうけりひららよ六初め
 一とを路といひ終乃七文字を尾といふ



濱成式。本且躰七種を出入中。二身三無頭
有尾無初五字故云。無改有尾

神日本磐余彦天皇。較于皇師哥云。今云
本紀道臣
命哥也

えうをひらうらうらう人ひまのともたしひをす

これよりれみ字と熟といつら。れまとも同句をい
よて尾とら。れ才二の猿尾才に乃列尾へ結句
よらまそいへ才を尾とす。あうらよ。八上の句。地路
し下の句を尾とす

式云五有頭無尾。八坂入姫答活目天皇哥云

よのなりをうゑそくおほさかかこけん

無腰以下故云。無尾才三句為腰々以下為尾

二身才二乃。我の上句を頭とす。うらうらうを旋頭

とん名付より。けゆゑに式よ七種の雅躰と云

中よ身二を雙又本とす。式よいづく二雙又本以六句為一絶

才三句終字為初韻
才六句終字為終韻

大神高市萬呂御哥云

えうらりれあれひく山はうねとらうねと

たうらうへあはといさそくゆあこまけ

ゆきをとも同韻の字なり。今ハ韻を用うれは

義ハ用なり。雙又とくみ外ハ上上の句をな

らうらうの句をまうそくせにらうらうの句を

お雙又ふうらうそくをまうらうれを旋頭

か行しんたり。果義抄。旋頭ハ上よか

よむなりたるよかふる御也。かろゆ急よ信如武
よ此しを雙本となくこれ印にるみと
ししうしにる義にわねしとんきる松し
にるいの義を同名をもちうけて餘義を
くしとせしれくれとそめしりあそま
又旋頭方れいやうとせしれるも心ゆま
しり今かよのせし指へし
旋頭方

又白の外一白とくい胸腰終又七字五字ん
よほり

山上庄良草記方

しのりれといくをと記るそしにあ

をいれへし又ららはあらのを
これしれよ七字らくいもあ也け方あ武より
今まへく今いくけ胸といいの才二乃白也
七字くくらちりと六才之乃白れも也とれ
し身に乃白を常此務の白とす

橋貞樹朝臣のあのりそよあらしい

あねよりうしほりすかあもからほと
りとららたつれありうゆいく
これを務ま字をとくもあ也
今いく胸といふも才之乃白なりあ字はくま
きらなりとはほとまり乃白なり

小町并云

ゆめらひあしもやひめすかよとも
しきやふいなれうつにひともあしといあす
是ハ終に七字なりと云なり

今いそくこれ下乃句此初に七字乃句とくも
らなり此中武といつははいつれ乃式にあられ
つるし只下の句此初に六字七字んにすうせて
一句とくも腰乃句も常乃とくも六字なりあ
も七字にもすびといひてまなん貞樹初乃
此はに腰に六字をくもなりといつと七字下乃
句此初となれも只下句にくもといふつまにや又
集才十六に六句乃多此才に乃句と腰句といつ
今私に六句の交につくといつと才一を以て

二を胸と一才三を腹と一才四を腰と一才五
尾といふなり

新室乃か(一)より

新室とはあしとくはつ家なり清寧紀云
二年冬十一月依大嘗供奉之料遣於播磨
国司山部連先祖伊与来用部小楯於赤石
郡縮見屯倉首忍海部造細目新室見市邊
押磐皇子子億計弘計顯宗紀云適會縮
見屯倉首縱賞新室以夜継晝同紀云か(一)より
あしとく遠きる屋ハ先事とか刺て壁としか
ふんなり今も田舎にハ柴をくにてかこひて壁乃
かちりにまらゆ急にや壁とかさしりり楚辭

説文云

屋原九次、湘丈人云、荃壁カキ分、紫壇ヒシヤこれに礎
乃字を牆乃和訓又々々、れも田舎にかつて
右語乃殊なるなり、荃壁とあれも、常此草よても
かこいぬ、御座た万をね、お、後を種と
とびる、新室の之、草刈よとせとお、
ませといふなり、草乃とよりあふをせめ、
君のまたくは、か、草といふをうけて、草乃
ない、さそよりあふ、君にのよりくる、お、
ん、お、
見、き、り

古事記云

ナツクサノアイ子ノハミトヨメリ相寝トウケタリ

ムスメモタル人ノムコノ為ニヨメルヤナルヘシ

新室乃おじつれ子

新室瑞持子之年玉鳴裳、これとはにひむ
ろとあじつをこつ、まなす、讀ムカ、
ハ、清は俗に親乃法をふじといふ、清なり、新室
のあ、
御用瑞俗上鴈ラシキト云カトシあてさ、
方にお、
な、
後中紀云、時、仲皇子冒太子名、以新黒媛是
夜、仲皇子忘、
よ、
せ、
某乃、

前ノ多ト二首取合テ意ヲスミセリ初ノ多ハ新室(東レ)トナリ此多ハ已ニ東レル時ヨメリ

せらるゑとしり、世をハあつたこなりけしあつる人も
草乃としりあふをとりしつる人も二首にて
ふをいひつゝとり又いしり乃んあり世二首をむ
すめりららんれとむをむこのういひる成あや
のんにゆらんとおひいてあるんよやあしとま
上にか(草乃)におもしたる福とむむにせん
んまれもつらつらむいじら乃ん草乃りにさ
行なれとあり、草乃とくよりあふをとりしつる
ふれをこにんをあらむむむあなり、それとむ
うんのまにむむせんとあり、次にほのちとし
室にあひつゝこむむむにむむむむむむむむ
とむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

つらてそれを是にかきて川つゆを一つてあつる
あしとつる人あつたことあつたてしあやれる
むとあなり、むとあなりすむし 祚代紀下云、天
孫又同日、於秀起浪德之上起八尋殿而
五玉珠、織織紐、少女志、是誰之子女耶
世集才十にセメテ

是玉も玉もゆにおもむむむむむむむむむむむ
たた乃もにさむにうらうらく杯をかき、成成うら、是
にむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
もなるなり、織具もあはるも乃なれし、才十九にい
る祚なり、むむむむむむむむむむむむむむむむ
をむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

まうせしじとありにゆるすなり新照をてりくると
よあつとあつと福とてうなるはてりてあつたれを
まうしとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
にむしものくも本とよあつとあつとあつとあつと
にいじらるるまじ一つのことしよかハ一つはいやい支
をいよにいあつとあつとあつとあつとあつとあつと
かろうをとりあつとあつとあつとあつとあつとあつと
くろせりゆりさうあつた

らよゆるにらよ本をれんゆつとあつとあつとあつと
和名集之唐韻云 槻 音規 和名 本名 塩作弓
古事記雄略段云
也 才二にも枝槻の本とあつとあつとあつとあつと
ツクヨトヨムヘシ
物なれもふうくのいてかすすあつとあつとあつとあつと

赤根刺 八月出ムトテ赤気ノアルヲ云タトヘモイヒ又実トモニルヘシ

ふれーけさつさる本れりしにさる妻とそりあつと
とにらるるあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
万すをのたりにいされてあつとあつとあつとあつと

大の作志行いしをいさるい誘り常乃月をハ
多鶴備 神代紀威後之雄詰 心タケルナリ
れおさるいさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる
れれとあり 神代紀上云 松是共生日神號大
日靈貴世子光華明彩照徹於六合之内

惠得

袖中抄ニハラシエヤシト点セリヌハマモシナヌカト用ハカラス
おれかほをまを常にいさるいさるいさるいさるいさるいさる
人をうつりおりあつとあつとあつとあつとあつとあつと

當時虫かたしと「あつらん」

つすれりかほらさししつにわあすそわもー補
やとはあまり乃るすにりふたり反撰集にいそく
まゝいあをす侍る女のりたあぬーとそりたれを
あまりにやーぬーとそりたれハ又つりりるオシ
こ方にやいも乃かふと

天武記云

履中記

いもいあいもをひもあををかさく乃おちてあ
なりあさなひる仲ま子の早寝つもとに手れを
ますしてゆさささるさいなりあ今集にいそく
せら乃あさにかんし乃玉のおちさるをさか
あしんとさあさいてあるこまにさハ上にもは
つらさる廉乃端ありにさ乃紐ハ先恭
紀に天皇乃侍奇にいそく作瑞羅録多迹を根

源氏繪合

約産出のささり

アサトテノトヨムヘシ

約産出をささりてゆり約あり、あゆいもあにさ

安楽紀云

推古是歳

一さく相の名あり、雄畧紀云大臣圖出立於庭
素脚帯、ぬす家系とはあーまけくあるあり
詩云 因ハ潤也因もさふりれもはもありん

和名致立

今ノハバキヲ云ナルヘシ

メツラシキ詞ニ此詞スクナシ

何為

雖生モライケリトモトヨメル未ラカケル詞ナレハ不叶キハイキテラレヨシナシトイヘル意ナ

アカモフトヨムヘシ

あもまな乃すもぬれんささハ見をうんとし
いさ乃をにまらあんと
人あはこもハ人あ乃あはれもけてもえあを
ぬありけふ句あり、吹風にあつとハ風と人の
目にんすすといつくまもいさぬあり、つ

少く風にあつても人あはれふしなくしをもくかよひて
ありん物をなりし世下も^五しれ乃こを乃まけら
に入かよひえ縁さうらね乃ちうつとむれも風をよ
うらんとつり 伴物後には

吹風にワッばあはれひりてあつても
人乃あやれをとあこす入て

才十この方にいし

こりうじんのもりぶとく人にほりしれあさき末道
にハ桂花さういふりし山をうくこちぶかれをま
ろ山を又ハ^{近江國ノ山にてハチノマキト}とつりしをせめこいらいし
ふじすあなうりあきこりるぶとよめるにおなりし膝乃
あつたす一むてあつて人なせはかくいつらなりしこ

もろ山も大に貴神乃あつたすゆきにしとふりも
山をすえてとあゆきにもろ山とはいふなりし
あましくハ唯日こもにとつふなりし
えにあるいしあはれり

才十天漢タハシワタスタハタノト云

一棚橋ハ彦星ノワタレハイカテ人界ニテハワタルツト云カケタルサテソレヲアリテヨメリ

ツニカリト云ハアラカサラムトヨムヘキニ我モ牽牛ノ如クニ足ヲササラムトハヨメルを前ニケル如クアユ

クノコスバナイヒテ昔ハ足ヲモカサルトミエタリ

てゆらんしとつりやといふらんし
唐周
賀送^ル傍^ルを^ル嶽^ル訪^ル曰^ル 辞僧下水棚橋もあ乃上に
けさる棚に似れし漢にもあ棚といひ和よは
はれしといふなりし

山一乃乃らせれ

和名集云山城国久世郡久世 此集に久世の

詔坂久世の社なりとありけふなり けうせこハ

右於於遠云天照を神育吾勝等特甚種也常

懐腋下称曰腋子久世殿ナトイハル富貴ノ人アリテ其子共ナラ者ナトサシテ云リト云 懐腋下称曰腋子可右是其時也 懐腋下称曰腋子可右是其時也

これとハ、これをとつたにほしとつたり ありきたりな

才ハにもありて人きしとく、才四におはるるといつ

うし、おひといれす大九たにふりうとらあふ

とらめるにおれし、これをほしといふとにはしと

いふこれといふ句かへう方にふていふふり、右

款の祈なり、色將もおほくこの祈あり、山一乃乃久

世といふとおれし、これと久世といふに、僻をといふ

てららとせといふふもあふ、これをはしとい

ふをけなほしといふとらめるは人に誤なり、此奇

く右介集に

是川乃山田此をほしをあれと、こればはてふれり、

此方に似らふなり、但これをいふ、さよめにおひ

しけし、はてをれしといひ、これをあそきうにいふ人

あらんやのふなり、用本代を、才七巻にもかくかきり

来背ハ氏よや

右十二首

人鷹乃集に出といつて、彼約長乃方とれ、定か

さる、たよりほしうり、

園前のたよりなりと

をるちさいを甲此乃なるなり 日本紀云丘碑此云

依山乃ちさとも鳥あり名亦にもありす 乃此云

いりるもこさこさ後まよありとじまて誤まうるなり

廻の字跡乃字運乃字後なをを誤めり 是乃ささを

めりてスこれ人のちぬ同なるなりそれを知らる人

ありとも家いふにふてまかといそありてた

ちうさまらぬ時乃まぶるにまんとありよさるるハ

よーわー乃よーにハありす春風も花乃わさる

をさぶてあげといつよるなり好忠集避路なる曲をよ

しきまむへくれとも曲直乃曲ハまらりなれをよる

といふふにかより弟七に

こま乃ちさいといも足す興後はらぬつこまゆん此云

いれもよらるるなりといふふもて今とありしと

くれを去聲にハよ海で上聲にハよ此云し

乃すこにこりハんに方す一弟七に足さるし

れいりるるハ多未足道とかくれも三之同俊粒をさるれを

おほとわーちとらまれくれと右点ト三エタリこころちと西義

とす

玉乃れ乃すれすり記

すきさハ透なりけり袖中ニハキケキトヨメリイカ、オ四、オラストヨメハスケキヲ用ヘシ定さを

さしけさありきをありさといふし下の方カヨコヨ子トヨムハシに

玉乃れ乃すれすれさけゆさかりにいをかよをす祢も君ハ

ちいりりぬ風ゆさまらけあそらぬうかよをすこれ

く

紀氏本帖にハ

風ふけと人にいいて戸のりあんと云にいいてものを
玉され乃小すハ玉をさす小すれなり。篇を貫との
もいつり。史記范雎列傳云雎佯死即走以貫
索隱曰貫謂
葦荻之薄也貫を穿る故に玉されといふなり
こすば約簷とてゆららひいりまなり。才七に
玉され乃こすれば万とほしといつても今乃こす玉
密し小の簷とかかり下乃十八葉乃ちも玉密し小
貫し密簷とかかり玉されとのこすも玉をぬさ
てさるふれと珠簷に行て用りなり。法少細さ
にくも物いさすさけけさるをうらかつさてさ
らくともさるさるといはくもかう乃すハ

おいてこりのうらおるいとさるし。されもやを
う川あさていていつすハちくよなす

うらひさす 三之 後撰云 兼盛集云

姤 下并 故ノ誤ナルヘシとよあつと乃んをーらす。此を下にいいて

おほし 玉篇云 姤 古侯切 遇也 故乃字カレ

ミヤチニアヒシトヨムヘシ
禁中(行)ふたいてんを

乃之なる 和名集なく大乃 乃す

乃世ハ

まを ミヤチガナトオモフカモト子カフ

見 ミヤチガナトオモフカモト子カフ

よは 疑乃欽

んれ 疑乃欽

体律凝くしめたをうれはる方にもうらひきなり
まのほろとさうらや母とをれましくしつみ
より下百四十九その人磨集より出るとなよ

人所察 ウニハ心ヨク子ル メラスラハヨソメニナリ氏ニタキ 実ニハ及ナキヲ云リ
こひいふハこひりねとや

此下に又ナみに

拾遺下句ヨトツテモナシ新古定家マ
作無ニハハコトツテモ又ナキヤ
古今集に

こひいふハこひりねとや
乃ゆき人にさるとつらなをさうらとつてなう
ますれんとまれんとけそありことつていあれと

源氏イケニコロシニナト云ル心ナリ

あふはなはあふれハこひいふはしてろーワきたこそと
元ヨリツラクモナクテを修ナトハミテドリヨレハ中へツレナキヲ云リ

心ナクトヨム

是量トホクヒルヘクトヨムヘキヤ
いつともこひぬ時とハ

これハ古今集に

私云イツトテモ恋シカラスアラ子氏秋ノタソアマシカリケル

ありー片設なりられかひしはる時をいそといえ

是耳 カクノミシシラヌイノキニトヨムヘシ

わり後にひしれん

小杜の阿房又賦云秦人不暇自哀而後人哀
之後哀之而不愷之亦使後而後哀後人也

五本軍蘭亭記云、存之祝^{シコト}今亦從^レ今之祝^シ昔
此^レ夫^ノ後^シ、覽^ス志^ヲ亦^レ將^シ有^レ感^ヲ於^テ斯^ノ文^ニ、あひあ
ひをゆめ、相輿^シ勿^シ湯^シ目^トか、くろは、あひ、さす、ゆめ
ま、か、く、り、ゆ、め、ハ、才、十、に

りきも、た、あ、ら、ろ、む、い、な、ま、と、今、あ、ろ、と、あ、ろ、を、ぬ、も
此^レあ、ろ、と、ぬ、に、有^レ與^レ奴^トか、く、り、又、同、是^シ、セ、夕^ノの、方^ニ
天^ノ川^マテ、乃^レワ、ろ、に、舟^ヲ、け、て、秋^ヲ、ま、ら、と、い、た、つ、き、よ、く
此^レく、に、與^レ具^トか、く、り、ち、さ、乃^レあ、り、そ、も、ぬ、も、ん、め
こ、く、ば、よ、と、い、ふ、も、ん、め、か、く、り、今、葉^ニ此^レと、具^ノの、具^ト
も、其^ノの、字^ヲ、此^レ、誤^ル、ま、其^ノ、乃^レ、字^ヲ、を、そ、と、い、ふ、よ、用^レ、ら
る、あ、れ、も、ち、さ、乃^レ、あ、り、と、い、ぬ、も、ん、め、あ、り、こ、も、ぬ、も、は
乃^レ、つ、き、よ、く、ハ、若^シ、こ、も、は、や、ま、い、と、今、乃^レ、あ、ひ、あ、あ、る
後、ま、れ、む、ん、に、あ、ら、ろ、と、お、し、や、ろ、や、ろ、に、さ、る、ま、や、り

アヒコスハ子カフ初ニテコソト同シアフコトヲ子カフナユメイトイヘル心
ゆめをばあひこすれゆめとらまんるういこひな

一此下も此字有
五十三

まろを乃ううんも
六、此、字、ヲ、臨、ノ、題、ニ、入、テ、五、文、字、ヲ、ア、ラ、シ、ホ、ノ、ト、点、
マ、リ、あ、り、を、ニ、テ、ア、ラ、キ、男、ト、云、心、ヨ、ミ、マ、送、来、
カ、リ

ううんハうつんにてつうたうなるをいふ

祿^{カク}代^ク純^{ジュン}に 顯^{ケン}園^{エン}玉^{ジュウ}といふ祿乃名ある顯と現
ウツシハハウツトモワキマヘスタシカナラヌ心ヲ云リ
とたなうんなる

なになんにいのら

あれやうものをいふまくとあるはあらし
うゝあやーイトハテトヨムヘキ
サレワタシノチカキト云ニカコトシ
見^レワ、せ、は、ち、ろ、う、さ、さ、ま、と、

見^レワ、せ、は、ち、ろ、う、さ、さ、ま、に、ま、の、家、ハ、あ、れ、と、ら、う、と
乃、ま、ろ、れ、も、人、め、を、は、く、て、う、さ、ま、を、ま、り、う、て

や、ま、め、す、と、ん、げ、え、の、へ、て、待、な、り、才、七、に
水、按、本、作、手、恋、ハ、下、回、作、ノ、字、アリ

こわくせはらうさけはばさりしほり今をわすれ
これをも介こしそもてをくんとをこりし乃おちらふり
早敷哉 ハニキヤシトホメテ則云ノトセリ哉ヲカモトヨムヘキ凡類ヲモテラスヘシ
なりあつらひしそもてをくんとをこりし乃おちらふり

君目
うらひちす見らち乃人ハ

才田岳申天星乃御方に人けもに園にまこ
らて味村のいちしはゆきこわううか君にけあ
ねハ及方に

山乃もに味村さうさゆきまれしおはさうか君にけあ
才十二に

内日判文にハあれしつる葉乃ううしうらハわあもつあ
才十三に志きしまるやまし乃うらう人さまたみちてハ
あれとも及方

式湯のやまののたも人さうまじおとくまにうらけ
毛詩鄭風云出其东门有女如雪彼别如雪
匪家思也

世れ中乃つ称のこらに
これをも乃方をうけてんゆへしあめ及政行人ハ
そりくにいりりし中にもわつたふもさひさり
乃こりるをますけんあをうりて共スうれ世の
人ならにありひるせももてくをえわとれま
てれふらとなり人才みに山上惟あまおせらる
哀世間難住歎にこれなれつ種にまらるを

とめくちなす板戸をおひひさきしよれなる
又如ノ字ヲ字ノ誤を才ハ世ノ中ノヲトメシアレハト云ハ是ヨレハヨノ十カノツ子ノヲトメト
此つ種乃もこらといふれなりもこらるをこら
オモハトモトヨムヘシ

こおけつ... 志在
阿及多なれとこひよ...
りといふにも来乃字をかぎり

遍来

遍ハ返と通に... 密

教に念備乃教を... 字なり

唐亦多編子作... 編同

あとなまこい...
ワカコトヨムヘシ

験なまなり

いもなす...
イハホノホララニアラタメテ...

神氏紀云、更少進... 而出者

天皇問之曰汝何人... 子

いもなす... 子

悔ハアトヨリクイイオモフ

意といふ... 敵

てくゆる... 方

か方々の... 方

建ハ... 官本

日くれな... 誤

とに夕... 父

に... 人

と... 後

與ノ下ニ奴字脱ス

じまゆん人とある方に傳へていつくしくあり甲こまぬ

かたしよし三座乃乃ハアイトノ乃使

ぬこま乃こまらまわけを

あゝひく物とつらなるは日乃出ん希ねに山のそ

乃わくくちうゆぬにいつり才田にあゝ川日く

るまてとらめるにおき一あゝ保ゆすといふまや

さうれちう、お乃裳りしハたりひまゝす待

若もまゝハ用ニテニヲモ言ナシ

こひをして志にまゝりめに

才田に芝女郎の赤持に贈る方サにそ乃中におひ

に一志にすゝぬにあゝすせいらくひをぬりたうけ

玉ゆにさぬぶの夕遊の可いもの

玉ゆもまゝし乃しりりこころ定まら乃

新古今

玉ゆ乃あもあもさうさうあさくうちやの秋風

こゝろこ海つうし定れまら一の心はそを此方

んゆこ遊す此ま初にけり神代紀に玉玉玲瓏織

仕し少女とつらに今玉書とかかりをあもせて

葉すりに玉乃あにやされともあまてはうにう

れもす神代紀下又云於是棄新遊乃勿至海

神し文其文也雄蝶愁臺宇玲瓏と用る

とけんなりまれも玉と玉と乃お觸てかゆ時に

ういにまゝあひてゆりけし玉ゆといふま光と

あまとをかぬ中になうかやく方城さゆるれ

りさに玉乃としてせらるるを肉にとろとせとをあ

愛ニテハ人ホメテ玉人ナト云ル心

るこし〜さぬふ乃夕玉影をわひ〜とのを〜
ふなり〜
中一よ赤持のちに

初ま乃ハつ称のふれむつ〜
うれとゆ〜
ケフノアレタニトヨムハシ

ケフノアレタニトヨムハシ

あす人につきよあまれつ〜
中くに見らり〜

赤依乃あり〜

四十二ノ物アソコニ中納言敦忠

あそこのはれ〜
玉ほ〜乃乃線ゆ〜

オモヒヨラス人ラシ

さ〜ゆ〜さ〜う〜に〜見〜を〜あ〜て〜物〜た〜り〜い〜と〜な〜る〜心〜に〜そ〜か〜く

そ〜あ〜り〜不〜お〜ハ〜あ〜ろ〜し〜を〜し〜し〜ゆ〜

物影にワ〜身ハ〜な〜ら〜ぬ

オ十九

恋にや〜そ〜親の〜く〜ら〜り〜人〜物〜影〜し〜物〜ハ〜人〜乃〜鏡

を〜れ〜れ〜れ〜と〜し〜ふ〜れ〜物〜カ〜を〜夕〜親〜を〜只〜詞〜の〜つ〜こ〜た

つ〜ら〜ら〜ろ〜し〜
恋〜ア〜れ〜ハ〜あ〜身〜ハ〜親〜と〜な〜り〜に〜ろ〜う〜と〜そ〜人〜に〜そ〜あ〜め〜め〜

玉垣ハ垣をほら〜て〜つ〜り〜社〜は〜あ〜け〜乃〜玉〜垣〜と〜よ〜む〜な

ら〜て〜か〜め〜つ〜ろ〜し〜さ〜詞〜な〜り〜入〜風〜ハ〜す〜ら〜よ〜ろ〜ハ〜風〜乃

い〜れ〜し〜ん〜を〜ゆ〜そ〜か〜ら〜り

行行不相妹ゆゑ

これをも〜ゆ〜さ〜く〜て〜も〜う〜て〜ん〜を〜難〜行〜く〜と

ふ〜ゆ〜く〜ま〜た〜や〜右〜詩〜云〜行〜く〜重〜行〜く

い〜ら〜ん〜ろ〜し〜を〜り〜り〜て〜

人ヲトヨムハシ
玉垣 難近 抄列 豊鴻郡 玉垣ト云ルアトマハ
名取ニアラヌ

暫 シゲ、クトヨムヘキル

こゝろに在る世まで

此年切ヲキハルトヨメル切齒トツノ時クニシハルトヨメリ此ヨニ似タリに在る世まで

肉とつけけらるるにありしは、玉さくら世

百てとけりてた乃めぬとは、借き同穴乃なり

さきにいりてやとらうてりあるかんさるあすけり

あかしくいりてふれす

此あしくいりハ才十六にあり候すす君とあるに

おけしこれハおれ乃もほいをいハもさへ乃

宮乃あしくいりすしハ乃にほいあるをり

才十七のちにもあしくいり乃みとらる

肌とおれにおきしにほふ屋し、ふにしに

おもてぬしハあしぬもあしハりぬなり

ささげあしを福もあれしして福もとれし

なすぬしハあしす秦ハ古語於建云秦云

祖弼月率百七縣民而歸化矣○至於長谷

朝倉朝○秦酒公進仕蒙寵○瑩織貞洞○

自注云所貢絹綿軟於肌膚故訓秦字謂之

波陀経と日本紀に觸と訓し集才

十二に吹風乃妹にふれあししるにも経老とかかり

いていりてさし

いてハ先渡のしとあり、こゝろハさくら

とあり、才十二才十三才十九にもあり、す

を乃あしとさしハり、とあるにおきしは

とあり、勿流かり

こいしあはこひりし妹もわ

よに似たりあありてほきり

妹あありきくふれは

ワレハソコフルトヨムヘキル

あや—くしよとにいつてうら—す妹あ

まをくふれまあり—をま—あや—

あま—うまおし三日のあふれ終に垂てふる

あや—くしよあや—さまてらんなり

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

あせれ清おつて

けりといわれの國よまをりし守山珠國之世親

私云キヨキカハラトイハホメラテ玉ト云ヘルニヤ

あせれ清おつて

妹ニアヒニムヤ為ニイノル

第十一

あまのつらき

あまのつらき

あまのつらき

あまのつらき

あまのつらき

あまのつらき

とひさりるありて一日へさそありぬすありとむら
まねるやそはありしれとやひと日のちとさ
カスレテオモヘトヨムヘシオモフナト云ノ字コ、ミテハ文字ナケレハヨミツケカヌシ若
加字落タル九

かよなるを

オセオ九等ニカキホナス入ノヨコト氏ヨメリ

鳴ラナストヨメルハ古事紀
柏錦ハ浮式のさうり繪あはせに既尺取りハらん
さむさうのさうりつてさうり既あをされされ

ひさしとさうり、細く君もわいふさうりさうり
人名をたしめて人よありさうりのち既さうり
伯錦 初ノオノレトヒトリトケヌハ逢キ瑞ナレヨシヨミナラハセリ又ソレニアヤカラムタメニワサトノヤウモヨメリ
コハヤカムタメニトキアケテ扱待ツケム命モミラストハヨメリ 下セ
百 百はれあつてさうりさうりマツケム命

云是時天下安平無徭役氣比也稔百姓殷富稻

斛銀沙一文牛馬被野 欽明紀云春三月
以麦種一千斛賜百濟王 宋玉賦曰式引
未考 海水深浩波浪廣濶非萬斛舟不可泛
所出 韓退之詩曰不須十丈藕如船つじとさうり乃
斛の数をりて舟のおほさうりとさうりハ百斛の舟を
さうり乃舟といふ二はさうりハ尺なり不さうりら乃舟
さ百尺なりをさうり舟はさうりは乃舟といふ海賦云候
勁風揭百尺注善曰百尺帆檣也三にハりはうと又
尺ありいれし舟のなるさ百尺あをさうり 意林記
云五年冬十月科停夏国と作船十丈船既
成之試浮干海便愜泛疾行如馳故名其船
曰枯野 舟名 愜疾 野名 枯野 先義 違
延壽式子

十二年

文集云

文 欽明紀云春三月
以麦種一千斛賜百濟王 宋玉賦曰式引
未考 海水深浩波浪廣濶非萬斛舟不可泛
所出 韓退之詩曰不須十丈藕如船つじとさうり乃
斛の数をりて舟のおほさうりとさうりハ百斛の舟を
さうり乃舟といふ二はさうりハ尺なり不さうりら乃舟
さ百尺なりをさうり舟はさうりは乃舟といふ海賦云候
勁風揭百尺注善曰百尺帆檣也三にハりはうと又
尺ありいれし舟のなるさ百尺あをさうり 意林記
云五年冬十月科停夏国と作船十丈船既
成之試浮干海便愜泛疾行如馳故名其船
曰枯野 舟名 愜疾 野名 枯野 先義 違
延壽式子

天地ノアラムカキリハアハムトヨメリ
月之れを國にほりし
なみとれあをまじし

廿十八日古人云

月之れを國にほりし

君のあをりしと臨しりり終

答古人云 家持

あしひよれ山にほりし月をれを

地に記置をこころをてい

ほしれあは木付池も家持のあをりし中

あありの今のあをりしあをりしとてこころを

久しれしと古人のあをりしは古人をていりるれ

相今乃しは印に彼しこころをれ

第十のうら

あまのりふもろのあまのりふもろ

妹のうらふくはつれあまのり

文選謝希逸月神云 隔千里兮共明月唐

李峤百詠云 三五二八夜千里與君同 謝欽

白賦云 東登庚亮之樓 月明千里

繰路者 毛詩云

あまのりふもろ 終るあまのりふもろ

石根あまのりふもろ

あまのりふもろに言記山へあまのりふもろ外ふもろ

あまのりふもろに言記山へあまのりふもろ外ふもろ

あまのりふもろに言記山へあまのりふもろ外ふもろ

アハ又曰カスト人歴集ニアリ可用也

人乃物と云ふはかゝるは心もくはれ即ちを
思ふよ海よりあつてありきるるは海に
中へ登りてよあり也女もくはれ人の
けしこくもくはれ物もくはれ心もくはれ
けしこくもくはれ心もくはれ心もくはれ
あつれ^用と云ふは心もくはれ心もくはれ

建武云を^大國蒲生郡奥津治神社^名
竹生徳乃神也と云ふは心もくはれ心もくはれ
今よりハ竹生徳をばすは他身十三巻よ
あつれと云ふは心もくはれ心もくはれ
あつれと云ふは心もくはれ心もくはれ
あつれと云ふは心もくはれ心もくはれ

ワカモフトヨムニ

あつれと云ふは心もくはれ心もくはれ
あつれと云ふは心もくはれ心もくはれ
あつれと云ふは心もくはれ心もくはれ

あつれと云ふは心もくはれ心もくはれ
あつれと云ふは心もくはれ心もくはれ
あつれと云ふは心もくはれ心もくはれ

あつれと云ふは心もくはれ心もくはれ
あつれと云ふは心もくはれ心もくはれ
あつれと云ふは心もくはれ心もくはれ

あつれと云ふは心もくはれ心もくはれ
あつれと云ふは心もくはれ心もくはれ
あつれと云ふは心もくはれ心もくはれ

私云日本記神功紀重日トカキテイカシトヨメリイカシイカリ音通スハ石ノ字脱タレ
ニテハアテサルニイカシハ嚴重ノ義ナリ

かれぬのち

矣ハ主字ニステ、ミルヘシ

ユモリストヨムヘシ

飛鳥井本点ノ下ニトナリツトヨムヘシ

妹のいほかえ

イムヘキハイヤガルト云カ如シ

義利不分明

あはらつらもさぬをうづれ

最勝王經 如來壽量品偈云一切大地土可知其

塵數無有能筭知釈迦之壽量

ツノシエヌトヨムヘシ

類々曰

こころはらりそりそりそりそりそりそりそりそりそり

あはらつらもさぬをうづれ

あはらつらもさぬをうづれ

こころはらりそりそりそりそりそりそりそりそりそり

處ト津ト通スル故ニツトハヨムリ

あはらつらもさぬをうづれ

あはらつらもさぬをうづれ

古事記云一ユモリスルホシ

あはらつらもさぬをうづれ

あはらつらもさぬをうづれ

あはらつらもさぬをうづれ

あはらつらもさぬをうづれ

あはらつらもさぬをうづれ

あはらつらもさぬをうづれ

あはらつらもさぬをうづれ

あはらつらもさぬをうづれ

あはらつらもさぬをうづれ

あはらつらもさぬをうづれ

あはらつらもさぬをうづれ

あはらつらもさぬをうづれ

石邊近江ニハアリ 祚名帳云一

鎌倉右大臣三

おほくられん今石色甲斐改 敵 たりよとさるるや

又作本水瀬ふいさひ一人よ改色の某

ときゆり人を改水瀬主代の述に乃何人され

トキバト云ル辺ニカ、リテヨメリ

毛御ももあの名を氏しきるや 命なも

やハ新よ河ああさし命をさほりやるり

命と改する命をさあハ改ハああ何

あんと改くたのそて改つてもさし改

命の人は改れさ命をさあハ改ハああ何

信海のううう白

これしとさしとさしとさしと改ハ改七に

と改改の改を改改り白改ハ改の改改改

ていさしとらと改ハ改改改改改

改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改

白改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改

改改改改改改改改改改改改改改

照る川くもの影も流るるに
その影はくもくもあつた
等十たよ

まをハをさしにしは
その影もさきしりまよ
ゆを

又此の字をさしてあり
ワステエスヲハラムトヨムヘキ
ゆをさしにしは

ねをさしにしは

此本点不交 袖中ニハニヲワケツハヌキシヲノト点キ

アヒタアケツケスケルヲモムスハヨリテノ午アフモノヲト点シカフヘシ
オ十五ニスハタニイモトアリ

又ハタノ板ノアケルトツケテ玉ヲ用タリ下ニ玉ノヲノアヒタモオカストヨメリシカハ此タハタニハ玉ニハカリ
カリテ心得ヘシ玉ヲツラヌクノ間トイヘリスケルヲムスフヨリテナト皆玉ノ録ナリ心ハ玉ノ緒ノアヒタアケツケ

かぶるもさあさる
己上四首皆玉ノ哥ナレハ是モ同ノ玉ノ歌トシテ見ルヘシ
於遺竹ノ葉ニ

姓氏録云 日本紀云

さのわてたな川ハ
術ヲタナトヨメリト見ユ
をたるもさあさる
棚ノ字アリあやまり花

かぶるもさあさる

雲間從

サワタルハ六ワタルニ古事紀云

鴨ハ子カコ

おしんをさあさる
紀は異乃字餘地
アヒタアケツケスケルヲモムスハヨリテノ午アフモノヲト点シカフヘシ
あはさるもさあさる

さあさるもさあさる

宋玉高唐賦序云妾在巫山之陽高丘之岵且

為朝雲暮為行雨

齊明紀

建王宮於此陰山

今珠るるとしれりうらやまのま

あつらひしこり何のそけりん

とちかた路へり

春揚うらうら

柳を打てかづにしらんをばけり春柳

葛下ニ木ノ字ヲ腕タル也

しかたそめをやうしうあつたけり身五よん

やれよとありの

ま白山くまおくれ

念モフト

かかるとし

トホケトモトヨムヘシオ四

まき君をの思ふ也

あゆまよしわ

あゆまよしわがくわわ姉をねよん

高山非名取

あゆまよしわを思ふ

あゆまよしわを思ふ

あゆま

山妻のこをわを思ふ

あゆまよしわ

あゆま

あゆまのこを思ふ

山クサ 水校本類聚可用

和名鈔云

是ニテハアルニキニ只庭系ト云ニ對シテ山ノクサ山草

あゆまのこを思ふ

トハ云ナルヘシ

あゆまのこを思ふ

カモホエトヨムヘシ

さき人のまゝあつて

身七もさうあつて乃さうあつてゆりてあつてあつて
乃さうあつてさうあつてゆりてあつてあつて

友乃世のーさうあつてさうあつて
さうあつてさうあつてさうあつて

イモカ命トヨムヘシタノメタル人ノ命カタノミカタケレハクニトイフトモハカリカタシハヤクアムノコハロ

ナリイモカ命トイフハ下ニタニチハフ神モワレハクニスキシユヤ

妹ノラシケクモナシ

妹ノみもをさうあつてさうあつてさうあつて

ほよあつてさうあつてさうあつて

これとあつてさうあつてさうあつて

潮菴平をさうあつてさうあつて

菟子日本紀カハ

玉篇云云

為席

今案これと行にまはるは

よるさうあつてさうあつて

よるさうあつてさうあつて

和名鈔云ー

山登ノモノハ千シヤノ木ト云

いかりさうあつてさうあつて

つげずせたにふれひりつをうづれなるといふ
なまの志はあつていふをいふゆゑなりといふは
色白き物ありていふはあつていふはあつていふは
さけられらるるをいふはあつていふはあつていふは
経をふれていふはあつていふはあつていふは
みるゝにゆりよこしけの

核延子葉なりかきつていふはあつていふはあつていふは

核根ト云ヘルヨシシ菱ハ草根ト註シタリ若カヨヘルニヤ又飛身井本ニハ根ニツクリ

潮ニナトヨメルゆカタシウシホニナトヨムキ元六帖ニハシホノ子ニサスコスケトヨメリ

是モイカ、オホユ 此ガニテハスケヲモシノフ事ト云ヤウニヤユ下ノガニ

イハホスケシノヒテトヨリ

それトに毛もいふその外あまもいふありあつていふはあつていふは

私云菅ノ根ハ土中ヲカタコタトハニハレハツレヲシノブトイヘルニヤイツレノ本草モ

シカレハサモイヒカタシ 者ヤハニハスガノ子トリテシノブクサトヨメリ

はよもいふとありていふはあつていふはあつていふは

いふをかりていふはあつていふはあつていふは

なまの志はあつていふはあつていふはあつていふは

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

アリのカヌレトモ

かきしーいささくちゅうめく山草花

そくしーいささくちゅうめく山草花

山草花の麦門冬をとりてはきあすてうれん山草花

ら草花をよぶすけしよありとあやまきけのそく

とつげあかひられまられ片断いあよるひま

かこまいあよるひまひくしよありとあやまきけのそく

そくしーいささくちゅうめく山草花

て家ののちりよあまれさかるといささくちゅうめく

くちゅうめくちゅうめくちゅうめくちゅうめく

つらられちゅうめくちゅうめくちゅうめく

解人不有

私

側隠

孟子曰

シノヒメツレハカタモヒヲトヨムハシ

用

山菅

キコユセシメツトヨムハシ

オモコウラカレニケリトヨメル思草ナルヘシ思草ハ生レモワスレ草ハ不生トヨメリワスレ草ハ三愛草ナリ

菟

ハイルカヤルライカテノキハヨメルニヤ

衣一名鳥韭

和名之乃

又云稗教本草注云屋遊

和名

夜乃宇倍

イラカノ下草トヨムキルミルミヌオヒストヨムハシ

乃吉介 屋瓦上青苔衣也この國よりあまのい

ふハ屋遊垣衣よ海よりあまのい

乃あまのいハあまのい

稗

和名云

稗と稗とけりあまのい

私云

田畠ヲスキカマスヲツトエスヘテ田ヲサハエツコヤシヲハヤサヅラムカ為シカカスル田ニモコエハ

オノツカラハエ又ハモミニシリテモ生スル

稗よあまのい

ゆめよみくさり

うねよ准とらに今の方も秋柏とかかきこれとも
用六帖曰あさうしーしとむじつされさうふゆも **和名集**云

飛驒國益田郡秋秀 阿佐 くれいふれも阿佐

とよあるもさうささしすてに世澄あれも下と

おるーくさしーとすなり **ぬるや川**とけ

くるハ下乃方にも田八河邊とかささし今潤の字

をかろふおるーあれも柏乃秋さうり柏乃

にぬるさうや又合欵本はあしれもさうつ乃

草本スうハ秋ハ葉をよれ書も葉をのれもそ

乃中も柏乃いちーるされ浄工にふん花乃開合を

あて書夜代知とさうり **事文聚後集二十三云**

漢園中有柳狀如人號曰人柳一日三起三

倒故江之嫖賦云不比禁中人柳終朝刺得

三眠は乃流につは船になりてぬるといふに

あす船もさう葉のまうてあれもかくハ時くさ

ふゆー ノシハメニ袖フキカ 定家口のさう出てぬるや川色 フル秋ノ初風

られー ノシハメニ袖フキカ 後のふにて納涼のさめに川色にお

てぬるふなり ノシハメニ袖フキカ 船柏とおさてぬるや川とつけ

さうはぬるや川といふ川のありてさめりくさえゆ

されも若らりかんさうふなり ノシハメニ袖フキカ 秋遠抄をさるに

中乃末に文城部をさる中に流流と標して

八省院 **秋葉院**等をさるに出して終にさうて云

紙屋院 圖書別所 在野宮末

漆室

内近別所
今若廢

在上西門北脇

これの記述の字
ありとあり

九十九のしき

鷹屋院

在紙屋北人

今若廢

此中にり漆室をぬるやと讀れ氏に漆部あり
うろハ漆の物なりゆゑなり文屋を文室とも
かけもなり紙屋院も紙屋川あれも漆室も
昔那とまらちの時ぬるや川をさるふもやと有獄
乃故実りらぬ身乃こころきよみありわらへこ
おそれぬ風情も半付作りさそ川色の一のめ
つけさるも川色におろし一のいひけさるなり
人もあひうそはこころ人にあひうそ

数回書きたり又入る日ハ一

万の人の又あしきたり一のあま人もあひうそ
そとれぬ目のちを記ち也又甲さるるそとれぬ
りまらぬぬほとをれも人もあひうそ
そとの白ハゆもは標ゆるあり不顔面も云勝
ももにうろをえてもあり作若れらるらんや
初し又枯柏の字れまらぬそもやゆへ
淵とつらハさ記のこころ寝るらんうろを解と
りて寤寐も記とまらぬ枯もなりそとれぬ
まけらとわらとりのさ記又今東次との字よ
はけそららにねも女のまらぬとらハわれ
白を人もあり一君よさ記とらハわれ
上よ山菱とあり一をさ記とらハわれ

んやしとあつたふくゆるしてををつらうを
にたふにうもといふきれら上のきりし
然も何ふ人なれうもくも人ふりれまんに
世う人ううらに君も一人のたれものを
やとりたる人

子ゆつはもあらんと

五味子乃昔れをいひてれてあまきつあふ
ユメヲノミトヨムシ

あひらけひそけりけりそけりや

とれらのいらしれぬ

十市郡(磐余) 今市郡(磐余) 今市郡(磐余) 今市郡(磐余)

三之曰イキハイキゴヤリ 雄略紀云田

邊史伯孫於蓬萊丘答言田陵下 伊致跡姑

和名鈔云尔雅注曰鉄益ニ言覆盆子 和名以知古 今案覆盆子作覆芳福又見唐韻

逢騎赤駿者

かほのれあとかさ

形にしあゆみの道のほりし今のはれら
大なるあまのいもかきしあゆひしとを家
能くうしをせぬやそのことくはる人な
んとすもんまかきしけきはかれやと
いふてあひやまんらる下乃白をさうぬ
まはらうかつらうもまはらう大はらう
ゆみのあまのあまのあまのあまのあまの
とあひあししとあまのあまのあまのあまの
やあまのあまのあまのあまのあまの
とくくかきしとあまのあまのあまのあまの

水そよあつる玉のれ

こころをいふへいまねえられうらやまふくまふく

いふもあつるあつるこころ此ハ此ノ誤

玉のれあつる玉のれ

妹、うらむらひ、我をまらうとていひてつづる人

あつる玉のれ

あつる玉のれ

あつる玉のれ

あつる玉のれ

あつる玉のれ

あつる玉のれ

あつる玉のれ

あつる玉のれ

あつる玉のれ

あつる玉のれ

あつる玉のれ

あつる玉のれ

あつる玉のれ

あつる玉のれ

あつる玉のれ

あつる玉のれ

あつる玉のれ

あつる玉のれ

あつる玉のれ

あつる玉のれ

此ハ此ノ誤

あつる玉のれ

或本分ノ意曰

有廉叙波ノ四字ヲ一字脱シタルトミテモ明ナラスコレハ四字ヲウレモノハトヨミテモヲ手介於波ノ字トスヘシラレ

モソハナシノハト云意オ三或娘子等賜褰靴戯ニ請通觀ト云僧咒願ヲ時通觀作哥ニワタツミノオキ

ニテモユキテハナツトモ字礼年曾コレカシニカヘリイカムトヨメリ是モウレムソナルヲモトムト通シテ如此

ヨメリヤミ十メノ点モ心得カタケレ氏意ハ松末ノウレヲウケテラレモソトヨミテ終ニハアハムトヨメリ

とまゝに列はよひられりれはく

はたよふらふら今れはも **推**乃なれんあー
又水多滞よとてまらじもにひのさるもさるは
さふれよのひとれ

非云鹿斯之奔 維足伎と 伎は舒貌宜疾而
舒田真群也

鹿のうらつれらとてまらじもにひのさるもさるは
ひとあまこかりてあひあれとも神打つりて
えとねをまらじもやあひらんされぬひとまよ
めりや鹿と書ふとまらじもにひのさるもさるはよま
るしはのちよ鹿のしづ友能もよふり群の
あはよものたれも也完ハ実ヲ指一肉有り信
てうたり

大らぬよまがら

ふれいりそとく姉のこも人ゆんと思ふらとて
まひりりさつりありてありぬ事も一年もあ
らふらよせんををたひてんをたのこてま
とそらあや今葉格を急なれをいこうた
ひそとらあハたのち莫句の字なれ字なれてん
よかたしひとさひまをらしまされ又さる
もいこらあを年よあハいさるも強へま
たふらぬのけららまされ

ハシメ連タルニヨモナクコフルヲ云リ一年モハイカニト

未ラカケテイハハアラハラヲ指ヘシ

種をうみそしむあをまらあやれさる川

神代紀云

を彼種をれまゆとりのさるにふせて海をのり
よかられら人をいそららとてなれもや

オヤノテニヤミナハル君

才十二

あつらぬるりくかたれいゆらり
りあきくもけり姉よあしとて

才十三のちあつら

けちぬのけのうされまゆりり
まけり

なとありの^思常ハ^知と^思と^思あきあき
かりかけり

うまひのひらむかみゆら

うゆらハさき富者のうれ人あり良家君子

楮紳^{長流本}の^肥を^日中^肥に^うま^まむ^まむ^まあり

^{肥人}之^人トヨメル^人ノ意^コエタル^ハラニキ
あきけり^神木^神の^あき^てあ^のの^まけ^りなり

さきれ梅のされ中の作若乃名も妙令史畏

肥人あり名も真も黙乃肉も肥さるハうま

さきり也^類を^類流^類つ^類抄^類ま^類と^類人^類と^類あ^類る^類を^類あ^類け^類り

^私云^私親^私日本^私紀^私肥^私人^私云^私薩^私人^私云^私ア^私リ^私ト^私イ^私ヘ^私リ

一云ワスラエトヨムヘシ
けちぬのけのうされまゆりり
まけり

あつらぬるりくかたれいゆらり
りあきくもけり姉よあしとて

早人の名もあき
早人の名もあき
早人の名もあき

續日本紀云
唱更ノ二字ヲハイト、歎ハヤヒト、瓦ヨムヘキ
神代紀曰

これまゝ今令れ方よ知らり
しるしにさしつけられん

下向名惜念不得とがなれん今令れ念不得の二字
うれ守り名のそしけりおまひりぬるといふ

刀銘ヲ切一式并令義解
乃名を雕徒らぬ也季才ハキハハ山王の身にほたり又

惜物をぬと名のそしけり念しぬそあられ
なきしよあひのそしけり念しぬそあられ

朝月日とがよきまも
朝月日とがよきまも

朝月日とがよきまも
朝月日とがよきまも
朝月日とがよきまも
朝月日とがよきまも

月も朝月日とがよきまも
月も朝月日とがよきまも

根者トリワケテ交セルニヤ和訓ノ心モ奇ノ意ト見ハタリノ神代記ニモ三處迄
出セリ子細アルニヤ

根者トリワケテ交セルニヤ和訓ノ心モ奇ノ意ト見ハタリノ神代記ニモ三處迄
出セリ子細アルニヤ

根者トリワケテ交セルニヤ和訓ノ心モ奇ノ意ト見ハタリノ神代記ニモ三處迄
出セリ子細アルニヤ

根者トリワケテ交セルニヤ和訓ノ心モ奇ノ意ト見ハタリノ神代記ニモ三處迄
出セリ子細アルニヤ

根者トリワケテ交セルニヤ和訓ノ心モ奇ノ意ト見ハタリノ神代記ニモ三處迄
出セリ子細アルニヤ

根者トリワケテ交セルニヤ和訓ノ心モ奇ノ意ト見ハタリノ神代記ニモ三處迄
出セリ子細アルニヤ

トコトヨムハシオカ

なり里とる六みることありてあさつねらふ下に残る
もてゆめにそくそそはひりあ也下の二千五百あり
ひるあはりてうさまらうくはあり
まうあらんもふれとらて

これ二千五百あり上の句はあはりてそそ
私類ハ船ハニツ後ニムカ故ニ 日々心モアルヘシ
と記さやふのしんやあり

夕うれんゆれりあ トコトヨムヘシ射下字ヲ脱スルキ

此枕ハ二人子シ枕ニ汝ハ枕ヲサシラ云イツカ汝カ主ヲ二千テフタリ子ムト

私類ハ下句サシトモキミラニテハハルキ

と記ねんそらりやいんさあふらたのゆか
ウキテノミハミナコノ水ニ流ルコトク心ノウキクスル

こちすけつハまねとあふらたれさうとてん
りこし水のしよかふるあよ織沙のうそめらあ

まらり

梓ちひそけゆらほす

記云張而不弛文武不為也才十二もあはら
引てゆらばねまらうそあつさうらう
アのらそゆるさすのあらうねらうをゆら
さねとくばらひとと思ひまられら
なうらあまのせひはせらあをこ梅らあ
しあれやうれらあに
しあは月よそね神書ややあよ好去好来
まらり

たあはらまらうあ國をからうつよいひつひあ

そこの言霊とかかりうに言霊の也そのちりもふらえり
うを問うく時を神の霊乃今流してその名
出告しらうあ給ふなり八十はりまこと八乃のら
言ニヨリテニナシクイモニアハムト
これおほき也本籍は此の時をう村とのまか
古来風辨抄ニハイモニアハムヨシトアリ
おしまれを給へるに流み十日のりら後とへ
おさせ給へるに流衝中おさつるうあつり給へる
かそおほゆりり
ておほよこまひるうら今うら
そと給ふまそれ月けとん
そまじらう所へうそまそれをらせなまうか
一けらま

はのつまきね月とてをんち

とあり 玉祥 志モ止石意ハ大タリ 私伝往石ノ石ハ人尔ん

丁あるまは神のみと成

侍従ハサモフトヨムヘシ 赤ナリ

出仕ニアキラス禁門ヲ出入スル時必名アリラシテ通スル故ニカシコシトヨメリシカルトキニ名ニテ

アハ何のゆイハヌ

ほりかこんをさしとあり

見てもみらるといそんやいしとあり

玉限くれとくかろるまはしあま三つあ者手ふあし
玉限ゆまうられとつけひの今乃とし第
たらま玉限目もかさねりてしてつけぬり
う印まかけらうとありゆあさうなぬまは
乃心まはけま今らるまの心まつけとも目と

洲ハあゝまゝをうつけさるればぬき記をさるるに
秘を今ハ垣といふまづけりぬ垣ハ内をさつて
つかまりを物うれハ也いふまゝの垣乃とくたて
る淵ハかられてあまはくくれらつまといはけけ
るなり

15
いづらめとよりせらる

ささるあゝまゝあつる川中れるや済ハ滑の程
なり

一水まはりるまゝあつる程にぬきとよあつる切る
るまゝにさひてさつりてあまはくくれらつまといはけけ
也次のあゝまゝあつる程にぬきとよあつる切る
よあつるまゝをさつりてあまはくくれらつまといはけけ

あつるいづれあつるまゝ

ささるあゝまゝあつる川中れるや済ハ滑の程
なり

ささるあゝまゝあつる川中れるや済ハ滑の程
なり

ささるあゝまゝあつる川中れるや済ハ滑の程
なり

ささるあゝまゝあつる川中れるや済ハ滑の程
なり

ささるあゝまゝあつる川中れるや済ハ滑の程
なり

ささるあゝまゝあつる川中れるや済ハ滑の程
なり
川の中をさつりてあまはくくれらつまといはけけ
滑とかりりんげれりら字あり
ゆりとはん一つにあまはくくれらつまといはけけ
ささるあゝまゝあつる川中れるや済ハ滑の程
なり
にさひてさつりてあまはくくれらつまといはけけ
次のあゝまゝあつる川中れるや済ハ滑の程
なり
ささるあゝまゝあつる川中れるや済ハ滑の程
なり

此のころ心は静寂後といふまじきなまじき二輪の
立月のまじき月也といふ人よあはれ下れ

旋頭分ニカホシキニカウニノアトフスルオヨムヘシ 此のころ心は静寂後といふまじきなまじき二輪の
立月のまじき月也といふ人よあはれ下れ

此のころ心は静寂後といふまじきなまじき二輪の

六拍ニハ結句ヲ君ヲトメムトヨメリ
私云シテ行人ヲトメムヨシサニトナリノカタニハ十モ

雷神 スコシウコキテ水技本
施昌井或本作メタ上ノ分同

下はゆきまじきなまじき二輪の

展揚反側丁のゆきまじき二輪の

思慮スレハ終ニハ達物ヲ何ニシテラレヌマウニハアルド

とまじきなまじき二輪の

とまじきなまじき二輪の

まじきなまじき二輪の
まじきなまじき二輪の

主員為らぬをいれひとせりといはれて

打格生半為れ田川澤毛叙千者波由

流

とまじきなまじき二輪の

かしの心は静寂後といふまじきなまじき二輪の

あはれ下れ

苦言ひつらとせり

とまじきなまじき二輪の

とまじきなまじき二輪の

とまじきなまじき二輪の

以前一百四十九首

皆人丸のつらとらんしつら、人唐集ノダツ先ツ後ニ出セルハ尊ニテ、前後此心ニオナセモ山榜風ト云リ

私案ニ人唐ヲ集トアレハトテ人唐獨リノダト定カタシ

又ヨシ人不知氏又他人ノカニシテ入ラレタリ好ム所ニ随フト見ヘタリ

正述心緒

さびもか標一なれとも人丸のつらとらんしつら

とととらんしつらとらんしつらとらんしつら

陳恩いとも准之也

たぢねのつらとらんしつらとらんしつら

たぢねのつらとらんしつらとらんしつら

たぢねのつらとらんしつらとらんしつら

あやふしつらとらんしつらとらんしつら

今もはらよて母つらとらんしつらとらんしつら

つらとらんしつらとらんしつらとらんしつら

もほつらとらんしつらとらんしつらとらんしつら

つらとらんしつらとらんしつらとらんしつら

里ニ無折ニ我樹杞豈ニ敢也之畏我父母仲可懐

也父母之言亦可畏也

吾妹子之ワコレテ後面カケニタツ

たぢねのつらとらんしつらとらんしつら

才ナはあつらとらんしつらとらんしつら

あやふしつらとらんしつらとらんしつら

たぢねのつらとらんしつらとらんしつら

なまねん福さねや 抄下

おん山乃まねのいさしとるり也

嫌うあられおのよよ福れ

才又よ

オノ山ハニキライハムタメ

をさあうらさす板戸を牛一ひよ

さうらさ

シヤハヨシヤ

披

かしらあり、徳新紀よ木兄とまれ沖を

まねくひのいさを行一ひさり

百一

今乃可記乃戸ハ披戸を板乃板戸と

しきまよ板乃すつわら戸也ははるよせんい

今不逢ハ後ハあいかナレサハリコアラム只今夜アムト

せんハ後をり

荊薦乃ひしを

サムケクモナシトヨムシ

六帖四 六一

て薦よあしゆえよしりあをもうもいひそあ

るれらりて庭よあるあかりこもり

かよりさうらあを

丹頬経をまほへるもあハ後也にうさ

カキツハタハニツラフノ枕詞

ゆとあしりハさハさあらとん也まうら

経ヲハルトヨメルハ 俗語 フルトヨメルハ古語 コリテサニツラフヲ用ヒ

にあらるあまそハあをしんなり第十に

いさねん今もさうら林を林乃

一なひよけん妹うすさを

とありのいさをあら也今れあをハあ

あしりあらまをよむあ

カクヨメハアハヨレ

恨しむとたれあせれ

け跡をたへえさうくゆす今ねふ是とよまは
うみんとやひいてせれなをーいふとよまは

心実ニクキハアヲ子ト恨ル心カラ外ニノ三見シ故ウラミムトオモタル所此人内某レトキ妻
ノヨメルナルハシ

ふんぎれうらさをうねてうみしとあひいてを
しうめあふそありねしやあまふまふなり

あまふまふありつねむじとめにはとけり
あまふまふありつねむじとめにはとけり

あまふまふありつねむじとめにはとけり
あまふまふありつねむじとめにはとけり

あまふまふありつねむじとめにはとけり
あまふまふありつねむじとめにはとけり

セ十八

敬類相 多ノ枕詞ノヤウニ心得ヘシ心ノ内ニオモヒハ多ケレト又ニハ出ヌ

けさうら
子モコロニ カタモヒトヨムヘシ 吾昔子尔名ハタツニキトナリ 何ナニカトヨムヘシ
イサハレトヨムヘシ母ニシカラルナリ
カハラ哉
ミツラムハ待テ君ムニ

下の子七をあまのなまよいうハ妹とともある丈夫
かこあひいり

所責 千根之下乃字 水校本
イサハレトヨムヘシ母ニシカラルナリ

あまのなまよいうハ妹とともある丈夫
かこあひいり

かこあひいり

かこあひいり

家人者 未ノ上ニ往ノ字水校本可用

人ハ度一カヨヘドイモガ伎ニテハナキ

或はあつたあすたる竹垣ともありつらねるに玉
とよきをうらなつり今東にこれいすむらあつた
よこらもあつた又あつたも松河もあつたあつた
玉とよきをうらなつたも松河もあつたあつた
倍とよきをうらなつたも松河もあつたあつた
第十にあらふよきとに國方

阿良多麻能伎倍乃波也之尔奈乎多氏二天由
吉可部麻思自移乎伎志多尼 伎倍比等
乃萬志良支須麻尔和多加太伊利奈麻之母乃
伊毛我乎柝許尔 之れよて藤玉郡之伎倍と
よきをありしとられつり又才五よ山と柝良方に
かくのよやゆま川エをらんあつたはれ

きふ竹年れつらつり

清のきくちをを吉倍とかつらへげつりよせてあ
おれおれおれおれ和名集よ藤玉今称とあれえ
ほまありたまといひつらかへ今もよき定

よや寸産をきくちよむらつり和州をかせ
よきつら竹垣とれといひてつらつらぬやうか
まて東にけつらつらつらつらつらつらつらつら

しつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

又ハキヨリ出セル名物ノ恒竹ナトノアルニヤ
私曰
三代格云

意ハロメテカキノスキヨリナリトモイモヲ見タキトヨメリ
下につらつらの國つらつらつらつらつらつらつら

廉玉の八丈河も何らるる鏡目不紀一廉玉川一大水
出で境を交てあはくもこけらる事と記きり
吾皆子我 ソノ名ハイハシハバサス母ハセムトヨメルニ同シ命ヲスツルホトノアリ名ハイフハシキナリ
おろろろの境へん 捨ハツルニアラス事タミアナステト思ヘル処則スニタ止

タレシムトカモハミセムトテカモ

三之云 淮南子云

これに中九上まれくハちうやがけんんけ
あつけれをく 三ノ名ハイハシハバサス母ハセムトヨメルニ同シ命ヲスツルホトノアリ名ハイフハシキナリ
詩曰自伯之東首如飛蓬豈無膏沐誰適為容
あつけれの影の人乃

我ハ内面ワスレヲセヌ

不相思

言ヲワカトヨメルコト持ニ見ヘタリ

あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃

氣は

不所知ヲシラエストヨム シラセストイヘルハシラサシメスノ心ニテ不令知トカ子ハ不叶

あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃

あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃
あつけれの影の人乃

鎌倉右大臣

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

あひそむるはみちのちかやいぬら

或ハワロキノツミノニヒトモツケタリ

或ハワロキノツミノニヒトモツケタリ

或ハワロキノツミノニヒトモツケタリ

或ハワロキノツミノニヒトモツケタリ

或ハワロキノツミノニヒトモツケタリ

或ハワロキノツミノニヒトモツケタリ

或ハワロキノツミノニヒトモツケタリ

或ハワロキノツミノニヒトモツケタリ

或ハワロキノツミノニヒトモツケタリ

或ハワロキノツミノニヒトモツケタリ

或ハワロキノツミノニヒトモツケタリ

或ハワロキノツミノニヒトモツケタリ

眉引ヲ六帖并類々ニヒキノト点ニヒヨキヲ用ヘシ

に賺の字を以てしてよく賺此云麻用彈扱け

糸舟六舟ナはよもんてあり

かろりこひんあらし

ちねあし月日そくもそく人をそひんあらし

とちねあし月日そくもそく人をそひんあらし

とちねあし月日そくもそく人をそひんあらし

世の事よとひりそんあらし

とちねあし月日そくもそく人をそひんあらし

第七よ

け扱文ハ此柄のたまや

け扱文ハ此柄のたまや

け扱文ハ此柄のたまや

かたはらも ぬいこひをん

恋もふかきうきもも 祈禱コレム有り、かくりてふん

よらんを給くと、ぬい禱もさひのむよあふと

しをぬくぬきうきをさそそくら役をばま

らやぬんといふんや、かまは上郎女、おふ禱まふ

あーそのひさきりふをそたをやあり

あふひよりけがくさうもとれを 祈禱コレム

年、悪よありーかま

及ふよ

ゆあーさきりりりりてかきさるも

ぬいを掌きさるよーたりーかま

日本紀に禱の字乃外法罪と也 叩頭と云ふ

乃しとありまねくハ罪科を謝せらるるなり
禱ハカクハくいのりや、那と能とみ言お色るれん
るれ乃しりり春と掌と也 和後乃とハかま
るわりの

妹恋 イモニコトヨムヘキ元本枕コニクラトヨムヘシ或本カニニクラトアリ本カノカハリメラ或本ニシルス常ノ
ノ十ラヒナレハコニクラノ点イヨクシカルヘシ
副ハツヘニト云ニ内シ後撰ニ云

私云紫式部日記ニ女ハニソノトをたあふハハニニソノト又侍を凡のなでうんハハハ
こひのうきをさきりり

新物撰ニモタシキトノセラレシトモ番物ニヨレハスソキトヨムヘシ

とよこらるる ぬい終りそまよあほそたえけ
ひんまのりられよる

念之 オモヒアヒリテノワサ
情者 遍ハヒノ音ナレニトツカニハ舟波ヲタニハトヨニ難波ヲ
ニハトヨモ類ニシカレヒコハチタヒトヨムヘキ
羨耳 ユメノミニトヨムヘキ

女ノ恋ハ 物ハチスルハ女ノ性ナリ

をかほ紙をよめてしめりて下りゆり何んされ
くやうとおつて記してんましくほりよきうれとよ
なり、**白居易**の**琵琶行**曰、**抱琵琶半遮面**
坐素琴了候**琴**の**隠**をいふとてふひよあひて
朝おのれをかられうとていひず八もよひよあひ
ておのれよとつる**隠**をいふとあり此おのれなり
あさともやりをよめくま明く

遣字或作連又作イ 私云可除ん

ア千サハフハホムル刊

おのれなりとてあつる音此よりいふれたよよくあつる
多ラホノカナニツカフー 音ラトルマウナレ反シキハ欲スル心アル故ニホリスルノ下略ニテ訓ヲナレリ
なすしよめりて女のあり君んめれほりよる君

てんみのほりよとてあつる今を流して今よ作
おのれのよまれ
今れ悲乃らるる巻をいづく君と人よつり

うれてともあつていふをいひて家へ出て行かて
あつらひとていふをいひておのれをいひて
らるんがうりしうとて下り白をいひて
君ハかろせとていひていふのゆゑあつてよかろ
乃人おれりていふとていふをいひて君の言せん
ををわうれていふとていふをいひて
たにわらとていふをいひて
いふとていふをいひて
たつらぬのよめいふとていふ

上よ母よとていふとていふをいひて
聿其日**万**章曰、**如**婦**如**之何**必**告**父**母
信斯言也**宜**莫**如**舜**舜**之**不**告**而**娶**何**也**子**墨

かゝるし加とハ棟裏の門ハ出入やんうぬをとり
姓式第中六た右場門式云凡若氏自之は出入内
表五位已上称名六位以下称姓名然は聽之其
宮門皆令湯土炬火同門亦同

たひいんその人るぬや

後於造ニ云

けりいんはらう人を思ふも又人の名を思ふ

如是耳

心ライタマシムル一十クママニスヒカヨヘ

ゆきと友のそあは

ソメキハ俗語ニ似タリサハキトヨムヘキ

そのまハはらぬるり澄あつるれはりらまよ

ムル類云

あはれとてだくこもあはれ思ふとなとらまはし

無仁紀云

けりところありとてこもあはれ思ふとなとらまはし

けりに何れと可あれたるは心を深固はひた

あつらひのあつらひのあつらひのあつらひのあつらひ

まはるもかくとひらるをたをやめ乃

こつらふよるこあや

驂倉含切驂馬也、そあすともいやういふこかん

よ、驟をそあまらるる、驂ハ奔也、り、驂ハ驂

ハ動也

いつたりしにつくしてまはる

人のしにすり中口に

イツヨリカ

シニスル用ヘシ類云

思ヒ我ハシヌヘトイヒラコセタル人ニモ分ニヨメルトニユニス人故ニ死トイフコトハ

イツカラカタメシノアルトナリ

ららるるすいせらるるに

奉有ニツレルトヨムヘキ

ふえをんをきていふんらりまはせらるるそま
つるなり、下もんをいそにまはせらるるおのれハ

とよあり、あつれも家身誠君にきりはりしうらの
るもてんちをもちもにらせらるはとの君あまひ、
私云 次上ノ分ノ五分

何ういふもつりをははさんそとありいとぬあらとてい
いふといひ又いひいふしをいふぬすしつを家

又スミハムノハムハテニラハノヤウナレドモ又スミハムヤトヨメルナルヘシ
九傳食言

つらういふ家いもすとなり
おもてたれうらもゆとやと

上にもおりのすれいづら人のすか物とすあり
面ワスナリヒスルヤト心得ヘシスルコトヲウルマナリ

ゆすやといふをもちもつり、弟十二にもいねてえす
やともあり、此集乃ほも又詞つひるう、えとあえ
せどなすいづにのいさうれさう、意乃やひこさふ
ふらうにづり、意に身のつらうとて、家しをもち

とらうまういづらにゆきも意もあはれすして

家にあらういづらもて、意を奴といふあり、今葉只

いづらうものさやつあといふも、意を罵ていづらあよ

ぶ河まやじやういづらもの物乃しとらういづらぬとを

一(か)いさういづら意とおひりいづらとあひとを

いづらすれんとすれとすれいづらつあ割いづら

これものぬまや自由にさうていづらもさうすといふ
アシキーラスルモノヲハ若校ヲ以チ和五ニ云リ

もいづらうものさうをいづらぬらういづら、弟十六

に穂積皇子乃侍あり

家にあらういづらにらういづらあていづらわついづら

これいづらに廣わたり方に

意ハ今いづらとあひづらをいづらこの意をつら

うれしき事ありしに奴乃あしき事ありき人につくもか
りけり又才十二に

まはるをのちきふも今ハ行^ハ意のやつふあはぬむ
うれしき事乃二説乃申にも意につくもあはぬむ
あしき事乃説いす^ハい^ハもや^ハ神代紀に^ハ不^ハ命^ハ孔^ハ
全^ハ勝^ハ戦^ハよ^ハと^ハ負^ハふ^ハ悔^ハいて^ハ茅^ハ渚^ハ山^ハ城^ハ水^ハ門^ハより^ハて^ハ矢^ハ
瘡^ハい^ハし^ハ行^ハ少^ハり^ハを^ハれ^ハも^ハい^ハし^ハ時^ハ左^ハ刀^ハの^ハ柄^ハと^ハ握^ハて^ハの
い^ハま^ハも^ハく^ハ慨^ハは^ハ大丈夫^ハ彼^ハ傷^ハ於^ハ膚^ハを^ハ將^ハ不^ハ報^ハ而^ハ死^ハ
耶^ハ才^ハ十二^ハ乃^ハ亦^ハと^ハ此^ハふ^ハれ^ハた^ハ意^ハを^ハい^ハ申^ハさ^ハ奴^ハと^ハ言^ハ
て^ハい^ハふ^ハり^ハ系^ハの^ハ紀^ハに^ハも^ハ賤^ハき^ハか^ハさ^ハて^ハい^ハや^ハい^ハさ^ハり

寒 阿野本ニ塞ニツルオ十三ニ天雲之影寒所見ヲ云ヲカケサヘニユルトヨメリ此サハサヘルノ畧ナレハ
疑トナリ今ハ人ヲいふとゆてかり月事なり
塞ノアマニリトニユルシカレハ爰モウテトサハラストヨミテ塞ヲ可正スヤ

心字ハ不懲なり

まれにんんを

弓とさ方ハ今したと弓とさといふことさなり眉かゆ
私云 希将見ヲ類シハメツラシキト点シタリニムニムトニツツケハメツラシキト義訓ニヨメルモサモ
コトオホエ
いた乃まゆれかゆさう人にあつた相にこそPさ
ひてゆらめ 意をうんとそといひてまゆぬかさ
つれまてにをはさうハ祝とぬと通すかんれ
才七に

いわけをハちうさういふことさなり今もつれひきなり
此に今もさし今もさうさうさう評の字なりお
ちうさにやとPさし此をといふさ見付さう
ほとりありあるとおさすかんさ神と昔乃人の

ふにひてにをまこゝろぬゆゑりやゆりぐんげ卯よ
もよこゆりむりしよききくにしひふ何乃ごうや
うありあまいゆりともふすまにパーッ
いとかりありあしひこいこいに

鮮明紀にハるの字乃をまひとせしよあり人
乃ちよるなり又同道とせふんまうし

に東の栞乃を乃方にもつらう人またらうい
人乃モル私云人乃守ルアシカキトアシカキノ枕約九人同ヲ漏シ来テアハル心九守ノ字ノ心
ゆんともあういともあうはらうはらうき
ヲ解スヘシ

河海ニハ央ノ字ヲサダトヨムト注シ玉ヘト不審アリ中央ノ心ト
にあうしゆれ人をもげらうおほきしつる

三之曰沙汰ノ字ハ
なりハ物産又申はとりふしをあらうらうと
今ハたしうか

今を誤て今に作れり今ひん年月スーこれ
くにハスーいあくにといまんうとし
目にあくすてらうともまこゝろなうともこひん年
今ハハスクナカラシメソ
月乃いくともきこひぬハハをあらて今
のげしたためしとととあり

和名抄云

私云ヤサシキカ
義鬼鬼物なり
日本紀

邪鬼をあらさしめしとあり
くやゆらていつ

水葱才四出タリ
今誤て又今に
作れり少熱ハ湯乃いさうくわぬき

スルナリ
かりてかりり 祚代紀にハ弱の字をぬり
あり

おもひこころはほろろとあは

面影とゆいし西のしをり

おもひけりしはあはは誤なり 才ナは東方も
ハストラフノ身ニシテ女ワラシハナトノヤウニオラテ居ムカト

おもひこころはほろろとあは
にそあはるもろふあり 知らずはくも文選右詩

小豆ハカリ字 和名ニ出タリ

よき為をあらはれしとよあれをす人あよとよと
おれしせんかかれさあり

言にいと耳にふり

書不~~言~~言不~~意~~意といつるもあはるる

もあるといひ出れも化乃耳にふりしはあはるる

和泉式月ノ弁にや

此注前ノ分ニ入ヘシ
日本紀にも 之場ニ状をあらはれしとあり

あらはるる何乃まら

今亦誤作令何乃まら

さよりをいふをあらはるかアアて罵詞にせん

多しをいふをあらはれてつらく

ニカルコトハ

源氏清女納言等ニカクニキトアルニ曰

さよしなまらにまらふん

わししよりありこころハ才ニ又尺きり

相見而

此五文字ノ而ノ字ヨミツケ凡但アヒミテト四字ニヨムヘキ又ノ字脱シテアヒミヌ

まらをいふをあらはるる

テ九才四不相見而トカキテアヒミテハト点セリ
心二日不見如三秋

あはるるをあらはるるありありて悟慢のふあり

を底にこはれりまらるるをたあはるるをあらはるる

んとてあはるるにこはるる

多にそしめしむんもうせて恋しよしなり、諾をじ
源氏ニモラヘトイヘル詞多シヨロシキホトノコフ道理ニテコソアレハ心ニ此小可ゆトハ不分明ニヌラ
トトオモコホコルヲオスラ云心凡オセシ小可トアリテ、スクナクトヨメルヲウヘトヨムヘシトイヘル
モコノノ
れもつりてかくり、延長天磨の房かくりあり
交むほし

かうつわつわ詩あり

世多ハ毎常ナレハソレヲナケク
人の心と多てあふしありやと詩ふいのみらんも

人事
大京乃ありに里

十市郡各系初ノアタリノ奈良へ遷都アリテ故里トナレリ

大和より弟二に天武天皇乃御幸にても大京乃
少りに里とちやせしまり、妻をこにほり

弟にりもあきまり **相取**の

夫木云
山一乃乃ららの里に妹をきていそいよりのあきふん

まねも今乃奇をたほしてやまればせん

夕されしき

約束ニテ待ハ先ノ夜ニ今夜ハ約束セサレソノナコリ故子ラレヌニ
おらり **相**乃なうりしは、詩をうりてあきぬ夜も
三之曰ナコリフ今モハ癖ニナルニカテハカタキニアラスムヘシタヌノ心ニ不知ラシラニトヨメルニ
秘しれぬをうり今を又令に修り

あいにをすこころハ

うぐいし初なり、神武紀云是夜自祈而寝

石根踏
つかにハ、
念跡オモヘド、ヨムヘキ元山道ヲカヨフ人ノヨメルナルヘシ

不相在 私云 類云ニハアハスアラムトアリ可用ル末ヲカケタル詞ニ

終ハとかきしれもはたにやとよむ

古魚イキタルニコソトヨリ 仙可用云

才曰大伴百代方に
恋しめんほはれせん、いかる日乃、あこし妹代多くりか

大了似る方なり

遊仙窟云生ふる日但為

樂死は之春更若人祇可倡伴一生之何須
買持百年身

志さく之乃枕うこころ

上乃十四葉にも枕初てとらあり、才十二に

内より更て妹はありいそ、友母の枕もとらにむけさる

ゆぬ家くとう ユカナクニワラクトカヨモカドサ、デトヨムヘシ

ゆぬ家をくらうこころ 在介集

君やらんぬやゆんのいさよいにまさら此いふもさす祈に

人と家とこしなれと似たりああり

とほくわれし 名 瀧 ケハ古語 才七 才十
何為而 ワスレントスレワスラヌ、ワステエトヨムヘシ

つめそはほれとも清層し、とほくわれとれこさて

君をこふくは、山花の詩よ、は来美酒之涼巻

といふふなり 玉伴の里とは定家ゆゑのほと

をば一里二里うしいとも玉ほし乃里とつけさるも

其ふしと侍り成勢紀に五年秋九月令詔國以

國郡立尹 ミヤノク オサ 伊豆タカラ 並福 フチキ 並勅 タテ 指 ホコラ 茅 ホコラ 為表 ヒシト

里人ハ世人ヲサシテヒロク云 アマタノ人ハヨヒツ、サフテ、オクシ我ハ千里ヲモ遠シトセスシテ
衆人ノコトクニハセヌ、アサカキニラフル心ナリ

あうしあよこいをすすり

日本紀に有何益とかうて、なにもあうしあわん

とらあり、あうしあよこいあうしあうしあうしあうしあ

てハ才十二乃長命におよ乃し、さ身をけりて

祇なん君ゆ急あうすさなひらほし、うになくあう

よんあうし 百世下 才十三ニ万世トモイハ百世ハ千年一万年トイハムカコトシワカモアイモトヨムヘシ
うつろしゆめにもニバラク命ノ召ニイツマテカニタムト

六帖首アハ人ノ題ニ入タリ

振ハ舊ニカリテ云リ

少リク君とじしあひし人なり
古今集のまゝのうらなれしうらに同
くらゐ乃あはれしよしふし

結ハちさるなり約乃字とむすふと日書紀によめ
るこれなりしれを髪にませてみらるるは又あ
がくちさるなりしとらるるにしりしゆふも
むすふもあなりしとれむむすふ君といふ又結
乃字をあくとしあり **併替物** 法よくくしりやう
け髪もかきぬ髪あらはして誰うあくよとよ
るんこれなり **事** 廣く髪法しりし 匈奴と大小
七十餘載すしつしあり **元** 恭紀にハ法髪をか
楚辞 約ノ字ヲラムスフトヨメリ髪約
こたくともあり **今** 乃あわけし又ともむしけ
れも下に今ともあはしつしとむすふにつきて

しとこ乃燕に過す牙三に高橋船后乃長奇に
白 乃神りかてあひし神り **ワ** くらさるま
しらぶよありさつしりてあつしにともにあむむ
玉乃法乃法しや妹とむすひしはをさす
ちく **西京雜記** 車又君白頭吟云願得一心
人白頭不相離 **こ** りいとを今とあやとこ
は白髪あてとちさるをむすひ **君** 乃一
んを約をさうんやむむすふをとくと約にさく
ありはくさん乃ころりしはなうら **併替**
物 法に

さうして法ひ細げいしてあひさるるはと
うれをさうし **今** 亦 **法** 令

奥山乃まゝこれ板戸

よらわかくふあり 音らやまのあられハ音の音

さなり人じらふかたそ乃音とんいしをとおされてありて

とえりすしてをあらも妹わらう乃おら

よに福てゆらあり

あしひきこれ山らしく戸を

榻戸ハさうら乃板もてをれる戸あり榻戸

といとんとてあしひき乃山といつらもあ

山乃まきこれ板戸といつらふにおれし戸を

あけおさすてやうもさもこは福の誰とてめてかよ

源氏物語 いふと曾丹字をう合てあり 定家 曾丹集

あけおさすてやうもさもこは福の誰とてめてかよ

月夜もいかに

うらちの徑より、信にちりちりとあり

